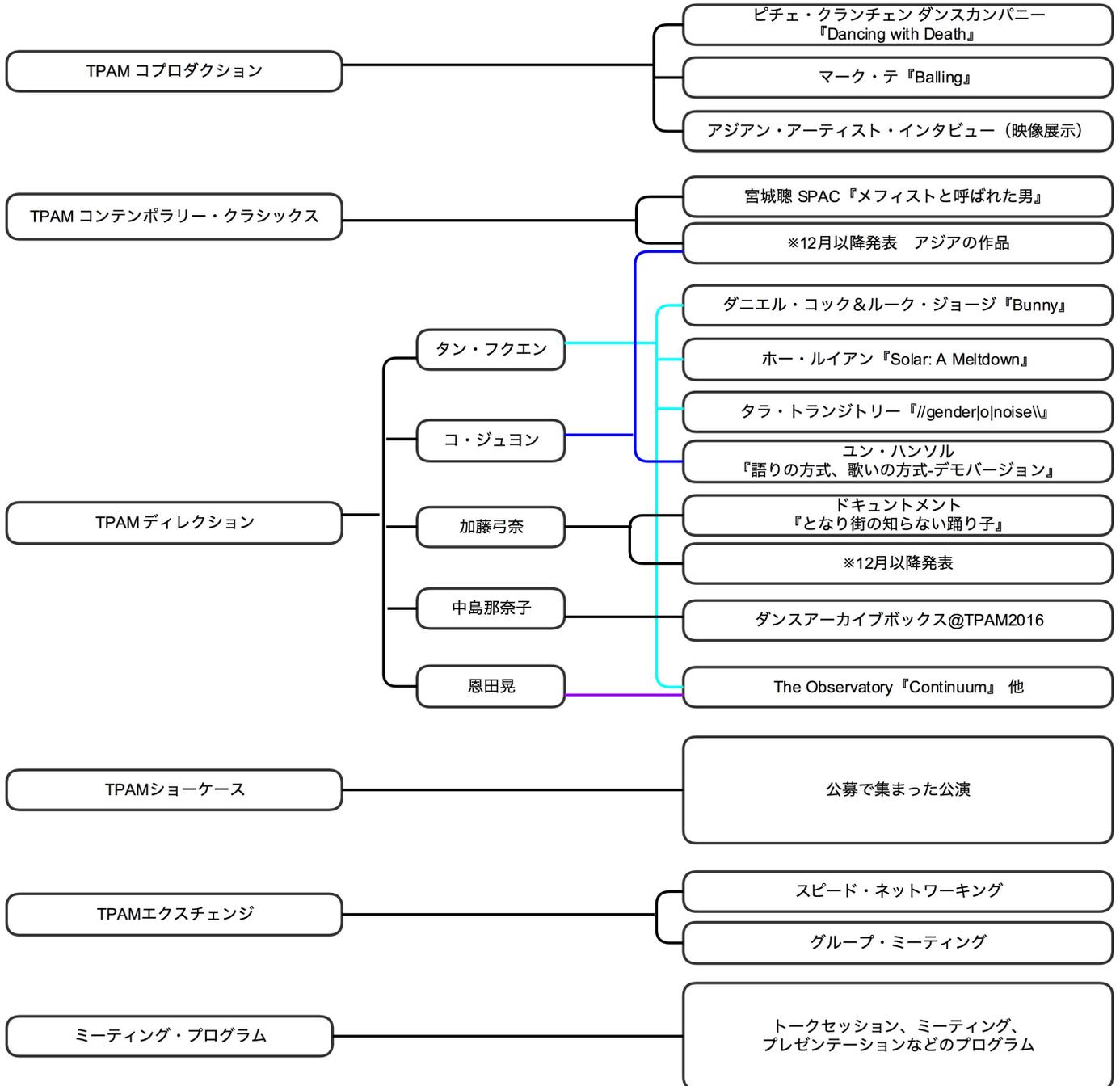


プレスリリース 資料

TPAM プログラム 一覧



ピチュ・克蘭チェン

タイの古典仮面舞踊劇コーンの第一人者、チャイヨット・クンマネーの下で16歳よりコーンを習い始める。バンコクのチュラロンコン大学でコーンを専攻・卒業後、ダンサーおよび振付家として舞踊と演劇の道を追求。伝統的なコーンの舞踊に現代感覚を加味し、伝統の心と知恵を守りながら、北米、アジア、ヨーロッパの異文化横断的な舞台芸術プログラムにも参加している。ヨーロッパ文化財団より「文化の多様性を奨励するマルグリット王女賞」(2008)、フランス芸術文化勲章(2012)、ジョン・D.ロックフェラー三世賞(2014)を受賞した。日本では昨年、国際舞台芸術ミーティング in 横浜や、国東半島芸術祭、東京都現代美術館で作品を上演し中モックを集めた。



Photo by Suthas Rungsirisilp

マーク・テ

マレーシアの演出家、キュレーター、研究者。歴史や記憶、都市といったテーマで幅広いプロジェクトに携わっている。主にパフォーマンスや教育の分野でコラボレーションを行っているが、展覧会やニューメディア、執筆、社会活動といった分野でも活躍している。ロンドン大学ゴールドスミス校芸術政治専攻で修士課程を修了し、現在はマレーシアのサンウェイ大学パフォーマンス・メディア科で教鞭を取っている。またマレーシアのアーティスト、アクティビスト、そしてプロデューサーの集団であるファイブ・アーツ・センターのメンバーでもある。

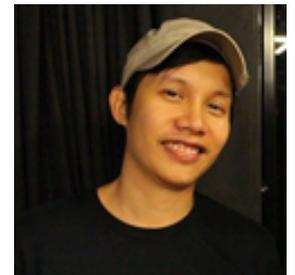


Photo by Andy Darrel Gomes

宮城聰

1959年東京生まれ。演出家。SPAC・静岡県舞台芸術センター芸術総監督。東京大学で小田島雄志・渡辺守章・日高八郎各師から演劇論を学び、1990年ク・ナウカ旗揚げ。国際的な公演活動を展開し、同時代的テキスト解釈とアジア演劇の身体技法や様式性を融合させた演出は国内外から高い評価を得ている。2007年4月SPAC芸術総監督に就任。自作の上演と並行して世界各地から現代社会を鋭く切り取った作品を次々と招聘、また、静岡の青少年に向けた新たな事業を展開し、「世界を見る窓」としての劇場づくりに力を注いでいる。2014年7月アヴィニョン演劇祭から招聘されブルボン石切場にて『マハーバーラタ』を上演し絶賛された。その他の代表作に『王女メディア』『パール・ギュント』など。2004年第3回朝日舞台芸術賞受賞。2005年第2回アサヒビール芸術賞受賞。



Photo by Ryota Atarashi

The Observatory

シンガポールを拠点とするエクスペリメンタル/プログレ・ポストパンク/ネオサイケ/ダークウェーブ/アヴァンロックバンド。「The Observatory」を現在構成しているのは変化するリズム、シンセベースの空間性、オシレーター、痛めつけられるギター。リフの核心には反復があり、いくばくかの真実をたたき出す。ノイズ、ロック、そしてメランコリー。動揺し分断された共同性。抑圧の新たな形式が抵抗の新たな戦略とぶつかり合う場所。アルバム『Oscilla』は我々の不完全な時代の想像的な揺らぎである。我々が体現する見えない獣の足どり。絶え間ない変化と不定形さ。それは新しい希望を示してもいる。声なき者たち、力なき者たち、貧しい者たちのために立ち上がる。収益と呼ばれる数学的規範以外に良心を持ち得ない現在のリアリティに対抗して、より勇気ある未来を想像する。我々の音楽は、我々の現在=未来を取り戻そうとするものだ。我々がどこに向かうのか、それはどのような環境的、道徳的代償を払ってなのか、決断するべきときが来ている」。



Photo by Philip Aldrup

タン・フクエン (ドラマトウルク／キュレーター／プロデューサー)

コンテンポラリーの舞台芸術および美術の分野で活躍するインディペンデントのカルチュラル・ワーカー。バンコクを拠点にアジアおよびヨーロッパで多くのプロジェクトを手がけている。第53回ヴェネツィア・ビエンナーレでシンガポール館の単独キュレーターを務めたほか、シンガポール・アーツ・フェスティバル、インドネシア・ダンス・フェスティバル、イン・トランジット・フェスティバル (ベルリン)、バンコク・フリンジ・フェスティバル、コロンボ・ダンス・プラットフォーム (スリランカ) などでも仕事をしている。



Photo by Masanobu Nishino

コ・ジュヨン (インディペンデント・舞台芸術プロデューサー)

1999年からソウルフリンジフェスティバルなどいくつかの舞台芸術フェスティバル事務局を経て、2006年からコリア・アーツマネジメント・サービスで勤め、2012年退職後から舞台芸術のインディペンデントプロデューサーとして韓国や日本のアーティストの作品制作に携わっている。



加藤弓奈 (急な坂スタジオディレクター)

早稲田大学第一文学部演劇映像専修卒。在学中からインターン生として横浜の小劇場「ST スポット」で制作アシスタントを務め、卒業と同時に就職。2006年、育成型の稽古場施設「急な坂スタジオ」の立ち上げに参加。

2010年4月、ディレクターに就任。以降、若手アーティストの創造活動をサポートするプログラムに取り組む。



Photo by Takaki Sudo

中島那奈子 (ダンスドラマトウルク／ダンス研究)

ベルリン自由大学フェローとして、老いと踊りの研究に従事する。ダンス・ドラマトウルク、日本舞踊宗家藤間流師範 藤間勘那恵。愛知大学等で教鞭をとる。ドラマトウルギーに Luciana Achugar 「Exhausting Love at Danspace Project」(2006年度NYベッシー賞)、砂連尾理「劇団ティクバ+循環プロジェクト」他。ベルリンと東京でシンポジウム『The Aging Body in Dance／老いと踊り』を開催。共著に *Dance Dramaturgy: Modes of Agency, Awareness and Engagement* (Palgrave, 2015) 他。



Photo by Gerhard Schabel

恩田晃 (サウンドアーティスト／キュレーター)

日本に生まれ、ニューヨーク在住。四半世紀に渡って録り溜めたフィールド・レコーディングを用いた『カセット・メモリーズ』で知られている。キュレーターとして、吉増剛造、鈴木昭男、大友良英、堀尾寛太、山川冬樹らの北米でのツアーや展覧会をポートランドのTBAフェスティバル、NYのザ・キッチンなどで企画してきた。



TPAM 催事沿革

- 1995年 舞台芸術作品の流通促進を目的に、産業見本市の形式に準拠した「芸術見本市」(Tokyo Performing Arts Market/TPAM)として開始。以降年次開催。
- 2005年 第10回開催を機に、コンテンポラリー・パフォーミング・アーツに取り組む国内外のプロフェッショナルを主対象と定義し、ショーケースを公募制から全てディレクター選任制に改組。日本語名称を「東京芸術見本市」に改称。
- 2008年 日本初のIETM (International Network for Contemporary Performing Arts) アジア・サテライト・ミーティングを併催し、プロフェッショナルの国際的オープン・ネットワーク構築を主目的と定義。
- 2009年 アジアのプロフェッショナル間のネットワーキングをテーマに国際会議「舞台芸術制作者ネットワーク会議」を併催。
- 2011年 東京から横浜へ会場を移動。売買からネットワーキングへのコンセプト移行を明示するため「国際舞台芸術ミーティング in 横浜」(Performing Arts Meeting in Yokohama)に改称。2度目のIETM アジア・サテライト・ミーティングを併催。以降、「舞台芸術 AIR ミーティング@TPAM」、「舞台芸術制作者オープンネットワーク」などの国際会議を毎年開催。
- 2015年 アジア域におけるネットワーク作りを本格的に始め、アジアの新しい価値を創造してゆくための「アジアフォーカス」を明示。アジアの国際共同製作に向けて次のステップを探るべく、公演プログラム、インタビュー・プロジェクトとミーティング・プログラムで構成される「TPAM コプロダクション」を開始。